

農耕地の孤立林におけるアカゲラの営巣木分布の経年変化とその要因

森 さやか（帯広畜産大学 野生動物*）

（*現所属：東京大学 農学生命科学 生圏システム）

北海道十勝地方の平野部に広がる農耕地帯には、帯状の防風林、農地に適さない湿性の残存林、小規模の屋敷林などの孤立林が散在している。アカゲラは森林性鳥類であるが、この地域でも比較的普通に見られる種である。この地域でアカゲラの営巣木分布の経年変化の特徴を把握するため、帯広市南部の農耕地帯に面積約40km²の調査地を設けた。調査地面積の約6%が林であり、1ha以下の林が全孤立林の68%を占める。1999年から2002年までの4年間、アカゲラの造巣期から巣内育雛期に当たる5月中旬から7月上旬に、調査地内部の営巣木の位置の記録と個体群の一部の足環標識を行った。

調査地内のほぼ全ての営巣木を発見し、卵または巣内雛を確認した巣を営巣とみなすと、営巣数は1999年から順に30巣、12巣、26巣、17巣であった。最近接法を用いて営巣木の分布様式を分析すると、1999年、2000年、2002年はランダム分布、2001年は一様分布であり、4年間の累積では集中分布であった。営巣林には湿性落葉広葉樹林が有意に選択されており、面積による選択性は見られなかった。1999年には、木立ちや樹木ではない物に営巣した例も3巣あった。

繁殖個体の捕獲標識は毎年行い、4年間で延べ雄25羽、雌26羽の繁殖個体を標識した。少なくとも片親が標識済みの巣の数は1999年から順に17巣、12巣、12巣、5巣であった。標識個体の営巣数の減少割合は、1999-2000年には67%、2000-2001年には25%、2001-2002年には60%だった。経年観察出来た個体では、つがい相手

が

消失し翌年は他個体とつがいとなる場合もあったが、前年の繁殖地から大幅には移動せずに継続して同じ林か近隣の林に営巣した。ただし、隔年で繁殖した個体が2羽おり、そのうち1羽は再繁殖地まで4.7km移動していた。

本調査地で湿性林での営巣が多かったのは、管理されていないために営巣に適した枯死木や腐朽木が多かったためと考えられる。繁殖期のアカゲラは柔軟に採餌環境を選択できるため、造巣に適した太さや堅さの樹木があれば、採餌場所からある程度分断された場所でも繁殖は可能であることが知られており、本調査でも営巣林面積に選択性は見られなかった。積年で集中的に営巣木が分布する場所は、まれにしか営巣されない場所と比較して好適なハビタットといえよう。標識個体のデータからは、アカゲラは営巣地への定住性が高いことがわかった。したがって、継続的に繁殖するためには営巣地周辺に通年なわばりを維持する必要がある。標識個体から得られた繁殖個体の高い消失率や新規参入率は、翌年まで定住するには不利な場所での単発的な営巣が多いことを示唆し、このことが営巣数の大幅な年変動をもたらしている可能性がある。